

クレジット:

Mathematics and Informatics Center 数理手法VI 2020 荻原哲平

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限ってページ単位で利用することができます。特に記載のない限り、本講義資料はページ単位でクリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下に提供されています。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。



# 数理手法VI

## 第5回

# 演習問題の解答

## 演習問題

$(Z_n)_{n \in \mathbb{N}}$  : *i.i.d.* 確率変数列,  $X_0 = 0, X_n = \sum_{k=1}^n Z_k$  ( $n \in \mathbb{N}$ ) とすると,  
 $(X_n)_{n \in \mathbb{Z}_+}$  がマルコフ連鎖になることを命題 2.6 を使って証明せよ.

(解答例)

命題 2.6 より,  $A \in \mathcal{B}(\mathbb{R})$  に対し,

$$p(x, A) := E[1_A(x + Z_1)]$$

は可測で,

$$P(X_{k+1} \in A | X_0, \dots, X_k) = P(X_k + Z_{k+1} \in A | X_0, \dots, X_k) = p(X_k, A) \quad \text{a.s.}$$

$p(x, A)$  の定義から,  $p(x, \cdot)$  が確率となり,  $p$  は推移確率なので,  
 $(X_n)_{n \in \mathbb{Z}_+}$  はマルコフ連鎖.

## 2.2 有限次元分布とマルコフ連鎖 の構成

# マルコフ連鎖の有限次元分布

## 命題 2.9

$X = (X_n)_{n \in \mathbb{Z}_+}$  を初期分布  $\mu$ , 推移確率  $p$  のマルコフ連鎖とすると,  
 $A_0, \dots, A_n \in \mathcal{B}(\mathbb{R})$  に対して,

$$\begin{aligned} P(X_0 \in A_0, \dots, X_n \in A_n) \\ = \int_{A_0} \cdots \int_{A_n} p(x_{n-1}, dx_n) p(x_{n-2}, dx_{n-1}) \cdots p(x_0, dx_1) \mu(dx_0) \end{aligned} \quad (1)$$

※  $(X_0, \dots, X_n)$  の分布を  $X$  の有限次元分布という.

※命題 2.8 より,  $x_{n-1} \mapsto \int_{A_n} p(x_{n-1}, dx_n)$  は可測なので,  $p(x_{n-2}, dx_{n-1})$  による積分が定義できる. 同様に右辺が定義される.

※つまり, マルコフ連鎖の有限次元分布は  $p$  と  $\mu$  の積分で簡単に書けるということ.

# マルコフ連鎖の有限次元分布

**Proof.** マルコフ連鎖の定義と条件付期待値の性質より

$$\begin{aligned} & P(X_0 \in A_0, \dots, X_n \in A_n) \\ &= E[1_{A_n}(X_n)1_{A_0 \times \dots \times A_{n-1}}(X_0, \dots, X_{n-1})] \\ &= E[P(X_n \in A_n | X_0, \dots, X_{n-1})1_{A_0 \times \dots \times A_{n-1}}(X_0, \dots, X_{n-1})] \\ &= E\left[\int_{A_n} p(X_{n-1}, dx_n)1_{A_0 \times \dots \times A_{n-1}}(X_0, \dots, X_{n-1})\right] \\ &= E\left[E\left[\int_{A_n} p(X_{n-1}, dx_n)1_{A_{n-1}}(X_{n-1}) | X_0, \dots, X_{n-2}\right]\right. \\ &\quad \left. \times 1_{A_0 \times \dots \times A_{n-2}}(X_0, \dots, X_{n-2})\right]. \end{aligned}$$

# マルコフ連鎖の有限次元分布

命題 2.8 より,  $x_{n-1} \mapsto \int_{A_n} p(x_{n-1}, dx_n) 1_{A_{n-1}}(x_{n-1})$  は可測で,

$$\begin{aligned} & P(X_0 \in A_0, \dots, X_n \in A_n) \\ &= E \left[ \int_{A_{n-1}} \int_{A_n} p(x_{n-1}, dx_n) p(X_{n-2}, dx_{n-1}) 1_{A_0 \times \dots \times A_{n-2}}(X_0, \dots, X_{n-2}) \right]. \end{aligned}$$

以下繰り返し命題 2.8 を適用すればよい. □

## マルコフ連鎖の構成

逆に初期分布  $\mu$  と推移確率  $p$  が与えられた時に  $(\mathbb{R}^{n+1}, \mathcal{B}(\mathbb{R}^{n+1}))$  上の確率  $\nu_\mu = \nu_{\mu, p, n}$  を

$$\nu_\mu(A) = \int \cdots \int 1_A(x_0, \cdots, x_n) p(x_{n-1}, dx_n) \cdots p(x_0, dx_1) \mu(dx_0)$$

で定めて、確率空間  $(\mathbb{R}^{n+1}, \mathcal{B}(\mathbb{R}^{n+1}), \nu_\mu)$  上の確率変数  $X_k$  を

$$X_k(\omega) = \omega_k \quad (\omega = (\omega_0, \cdots, \omega_n) \in \mathbb{R}^{n+1})$$

と定めると、 $(X_k)_{k=0}^n$  は (1) 式を満たす。この  $(X_k)_{k=0}^n$  を  $n$  を変えてつなげると、 $(X_n)_{n \in \mathbb{Z}_+}$  を作ることができ、以下を満たす。



# マルコフ連鎖の構成

## 定理 2.10

任意の初期分布  $\mu$  と推移確率  $p$  に対して, ある確率空間  $(\Omega, \mathcal{F}, P)$  上のマルコフ連鎖  $(X_n)_{n \in \mathbb{Z}_+}$  があって, (1) 式をみます.

証明は西尾 8.2 節定理 1 をみよ.

# 有限空間のマルコフ連鎖

## 例 2.11 (有限空間のマルコフ連鎖)

$N \in \mathbb{N}$  に対して,  $\{1, 2, \dots, N\}$  のみに値をとるマルコフ連鎖  $X = (X_n)_{n \in \mathbb{Z}_+}$  を考える.  $(p_{ij})_{1 \leq i, j \leq N}$  を,  $0 \leq p_{ij} \leq 1$  かつ  $\sum_{j=1}^N p_{i,j} = 1$  を満たす実数として,  $X$  の推移確率が

$$p(i, A) = \sum_{j \in A} p_{ij} \quad (1 \leq i \leq N, A \subset \{1, 2, \dots, N\})$$

をみたすとする. 定理 2.10 よりこのようなマルコフ連鎖  $X$  の存在がわかる.

# 有限空間のマルコフ連鎖

- ▶  $\{1, \dots, N\}$  を企業の格付（倒産しやすさを表す指標）として，ある企業の毎年の格付推移を上の  $X$  でモデル化することができる．
- ▶ 過去データから  $p_{ij}$  を推定すれば，命題 2.9 から将来どの格付に属するかの確率が計算できる．

## 2.3 マルコフ性，強マルコフ性と 反射原理

# $\pi$ - $\lambda$ 定理

この節を通じて、 $X = (X_n)_{n \in \mathbb{Z}_+}$  は初期分布  $\mu$ , 推移確率  $p$  のマルコフ連鎖とする.

まず確率過程の性質を示す上で役に立つ  $\pi$ - $\lambda$  定理を紹介する.

## $\pi$ - $\lambda$ 定理

$\mathcal{A} \subset \mathcal{P}(\Omega)$ : 部分集合の族が  $\pi$ -システムであるとは,

$$A, B \in \mathcal{A} \implies A \cap B \in \mathcal{A}$$

をみたす時をいう.

$\mathcal{L} \subset \mathcal{P}(\Omega)$  が  $\lambda$ -システムであるとは,

1.  $\Omega \in \mathcal{L}$

2.  $A, B \in \mathcal{L}$  かつ  $A \subset B \implies B \setminus A \in \mathcal{L}$ .

3.  $(A_n)_{n=1}^{\infty} \subset \mathcal{L}, A_1 \subset A_2 \subset \dots \implies \bigcup_{n=1}^{\infty} A_n \in \mathcal{L}$

をみたす時をいう.

# $\pi$ - $\lambda$ 定理

## 定理 2.12 ( $\pi$ - $\lambda$ 定理)

$\mathcal{A}$  を  $\pi$ -システム,  $\mathcal{L}$  を  $\lambda$ -システムで  $\mathcal{A} \subset \mathcal{L}$  とする. この時  $\sigma(\mathcal{A}) \subset \mathcal{L}$ .

証明は Durrett 5th ed. の Theorem 2.1.6 を見よ.

- ▶  $\mathcal{L}$  が  $\sigma$ -加法族なら明らかだが,  $\lambda$ -システムでも成り立つことで利便性がある.
- ▶ ある集合族が  $\sigma$ -加法族であることを示すのが難しくても  $\lambda$ -システムであることを示すのは比較的すぐできることがよくある.

# デルタ関数

$\nu_\mu$  はマルコフ連鎖  $(X_0, \dots, X_n)$  の分布であった.

$x \in \mathbb{R}$  に対して,  $(\mathbb{R}, \mathcal{B}(\mathbb{R}))$  上の確率  $\delta_x$  を

$$\delta_x(A) = \begin{cases} 1 & \text{if } x \in A \\ 0 & \text{if } x \notin A \end{cases}$$

と定める.  $\delta_x$  はデルタ関数と呼ばれる.  
この時  $\nu_{\delta_x}$  を  $\nu_x$  と省略して書く.



# マルコフ性

## 定理 2.13 (マルコフ性)

$(X_n)_{n \in \mathbb{Z}_+}$ : マルコフ連鎖,  $k \in \mathbb{N}$ ,  $f: \mathbb{R}^{n+1} \rightarrow \mathbb{R}$ , 有界可測とすると,

$$E[f(X_k, X_{k+1}, \dots, X_{k+n}) | X_0, \dots, X_k] = \int f(y_0, \dots, y_n) d\nu_x(y) \Big|_{x=X_k} \quad \text{a.s.}$$

$$(y = (y_0, \dots, y_n))$$

# マルコフ性の証明

## Proof.

$\mathcal{F}_l = \sigma(X_0, \dots, X_l)$  と書く.

まず, ある  $A_0, \dots, A_n \in \mathcal{B}(\mathbb{R})$  に対して,  $f(y) = 1_{A_0 \times \dots \times A_n}(y)$  と書ける場合を考える. この時 tower property と命題 2.8 より

$$\begin{aligned} & E[f(X_k, X_{k+1}, \dots, X_{k+n}) | \mathcal{F}_k] \\ &= E[E[f(X_k, X_{k+1}, \dots, X_{k+n}) | \mathcal{F}_{k+n-1}] | \mathcal{F}_k] \\ &= E[1_{A_0}(X_k) \cdots 1_{A_{n-1}}(X_{k+n-1}) E[1_{A_n}(X_{k+n}) | \mathcal{F}_{k+n-1}] | \mathcal{F}_k] \\ &= E[1_{A_0}(X_k) \cdots 1_{A_{n-1}}(X_{k+n-1}) p(X_{k+n-1}, A_n) | \mathcal{F}_k] \\ &= E[1_{A_0}(X_k) \cdots 1_{A_{n-2}}(X_{k+n-2}) E[1_{A_{n-1}}(X_{k+n-1}) p(X_{k+n-1}, A_n) | \mathcal{F}_{k+n-2}] | \mathcal{F}_k]. \end{aligned}$$

# マルコフ性の証明

繰り返し命題 2.8 を適用して,

$$\begin{aligned} E[f(X_k, X_{k+1}, \dots, X_{k+n}) | \mathcal{F}_k] \\ = E[\nu_x(A_0 \times \dots \times A_n) |_{x=X_k} | \mathcal{F}_k] = \nu_x(A_0 \times \dots \times A_n) |_{x=X_k} \end{aligned}$$

となり成立する.

次に  $A \in \mathcal{B}(\mathbb{R}^{n+1})$  に対して,  $f = 1_A$  と書ける場合を考える.

$$\mathcal{A} := \{A_0 \times \dots \times A_n | A_0, \dots, A_n \in \mathcal{B}(\mathbb{R})\}$$

とおくと,  $\mathcal{A}$  は  $\pi$ -システムになる.

## マルコフ性の証明

$$\mathcal{L} := \{A \in \mathcal{B}(\mathbb{R}^{n+1}) \mid E[1_A(X_k, \dots, X_{k+n}) \mid \mathcal{F}_k] = \nu_x(A)|_{x=X_k} \quad \text{a.s.}\}$$

とおくと、確率や条件付期待値の線形性や単調収束定理などから  $\mathcal{L}$  が  $\lambda$ -システムであることがわかる。

上の議論より  $A \in \mathcal{L}$  なので、 $\pi$ - $\lambda$  定理より、 $\mathcal{B}(\mathbb{R}^{n+1}) = \sigma(\mathcal{A}) \subset \mathcal{L}$ .  
よって任意の  $A \in \mathcal{B}(\mathbb{R}^{n+1})$  に対して、 $f = 1_A$  の場合も成立する。

(条件付) 期待値の線形性、単調収束定理などから一般の有界可測関数  $f$  に対しても成立する。 □

# チャップマン・コルモゴロフ方程式

$(\mathbb{R}, \mathcal{B}(\mathbb{R}))$  上の確率  $\tilde{\nu}_{\mu,n}$  を

$$\tilde{\nu}_{\mu,n}(A) = \nu_{\mu,\rho,n}(\mathbb{R} \times \cdots \times \mathbb{R} \times A) = P(X_n \in A) \quad (A \in \mathbb{R})$$

と定める.

系 2.14 (チャップマン・コルモゴロフ方程式)

$m, n \in \mathbb{N}$ ,  $A \in \mathcal{B}(\mathbb{R})$  とすると,

$$\tilde{\nu}_{\mu,m+n}(A) = \int_{\mathbb{R}} \tilde{\nu}_{\delta_z,m}(A) d\tilde{\nu}_{\mu,n}(z).$$

## 演習問題

上の系を証明せよ.

# 有限空間のマルコフ連鎖の例

## 例 2.15

有限空間のマルコフ連鎖  $(X_n)_{n \in \mathbb{Z}_+}$  (Example 2.11) を考える。

$p_{ij}$ : 状態  $i$  から状態  $j$  へ推移する確率 ( $1 \leq i, j \leq n$ )

$$0 \leq p_{ij} \leq 1 \quad \text{and} \quad \sum_{j=1}^n p_{ij} = 1.$$

系 2.14 で  $m = 1$ ,  $n = l - 1$  とすると,

$$\begin{aligned} P(X_l = j) &= \sum_{k=1}^n p_{kj} P(X_{l-1} = k) \\ &= \sum_{k_1=1}^n \sum_{k_2=1}^n p_{k_2 j} p_{k_1 k_2} P(X_{l-2} = k_1) \\ &= \cdots = \sum_{k_1=1}^n \cdots \sum_{k_l=1}^n p_{k_l j} p_{k_{l-1} k_l} \cdots p_{k_1 k_2} P(X_0 = k_1). \end{aligned}$$

## 有限空間のマルコフ連鎖の例

よって行列  $M = (p_{ij})_{1 \leq i, j \leq n}$  を用いて,

$$P(X_l = j) = \sum_{k=1}^n [M^l]_{kj} P(X_0 = k)$$

と書ける. ただし,  $[M^l]_{ij}$  は  $M^l$  の  $(i, j)$  成分.

特に, ある  $i$  に対して,  $P(X_0 = i) = 1$  なら,

$$P(X_l = j) = [M^l]_{ij}.$$

$M$  を推移確率行列という.

※企業の1年の格付推移の確率  $p_{ij}$  が推定できれば,  $l$ 年後格付  $j$  に推移する確率が計算できる.